



基調報告

横浜学童保育連絡協議会

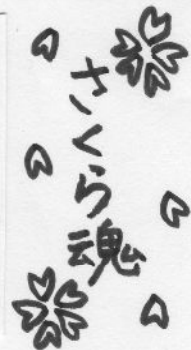
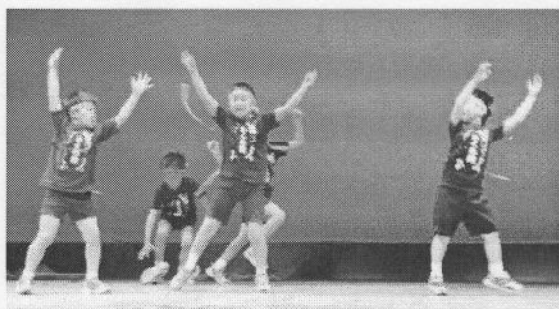
会長 森山 民雄

今回の研究集会は、十一月の東京での全国研・二月の県研究集会の中間としての位置づけとなる。全国研で分科会世話人を担当したが、その中で、「雪が降った時に子どもから「子どもでよかった！」という発言があった」と保育士が伝えていた。子どもの言葉を支えに希望を持って活動を続けていきたい。

学童保育は、97年に法制化、98年に事業化という流れの中で、横浜市としても名称変更や指導員要綱の廃止等変化が生じてきており、キッズクラブに対しては企業なども参入してきている。このような流れに対抗した活動を行っていくことが重要である。子育てと家庭を運営する重点施策として、保育所から学童への切れ目のない福祉の確保があげられるが、そのための公的資金が日本ではフランスなどに比べて少なく、消費税増税など家庭に対してしわ寄せが来ることが予想される。行政を正していく活動



を継続することが重要である。「どういふ未来を切り開くか」「お金を誰に負担させるのか」ということをキーワードとして、昨年の参議院選挙を受けて政治の流れが変わりつつあるので、活動を継続していきたい。横浜市においては、学童保育から「キッズクラブ」へと施策が移行しつつある中で、40万筆近くの署名提出を行い、3事業を維持することを市に約束させている。学童保育を守っていくためにも署名活動は非常に重要である。今後とも学童保育の質の向上に努め、我々のやるべきことをしっかりと見据えた上で一緒に頑張っていきたいと思います！



- 緊張したけど楽しんで踊れた！（児童）
- 全然緊張しなかったよ！（児童）
- 練習は大変だったけれど、先生をはじめ、みんなが協力してやりきることができてよかったです。（保護者）



- 初めての研究集会ですが、分科会などいろいろなあり楽しそうですね。（小すずめ 保護者）
- 人気の第十分科会、護身術初体験なので楽しみです。（六浦 保護者 松本）
- 指導員研修での「読み聞かせ」が楽しかったので、もっと深く知りたいと思い、第三分科会の「子供と読書」を選びました。（はすのみ 指導員 高松）
- 第十一分科会です。和太鼓に触れるのは初めてなので、楽しみにしてきました。（小すずめ 指導員）

● 午後は第四分科会に参加します。学んだことを日頃の保育に活かせるよう、しっかりと学んでこようと思います。

(南永田 補助指導員)

● 初めての参加なのでとてもわくわく。

(大正つくしんぼ 保護者)

全体会議講演



立教大教授 浅井 春夫さん

希望とは何か？

希望とは人生のチャレンジ権ではないだろうか。

戦後社会の構図が変わり希望が持ちにくい時代になつている中、働いて子育てすることは困難を背負

い(む)ことにもなっている。

貧富の格差は進み、生まれた環境で将来が決まる状況でもある。

こんな中で子どもたちのために、私たち大人自身も希望をどう育み発見していくか考えたい。

希望を拓くために

子どもにかける予算は、日本はGDPの0.75%。フランスや北欧の3~4%に比べ大きく立ち遅れている。労働環境も家族として子育てに責任が果たせる状況になつていない中で、子どもがのびのび育つために学童保育の必要性が求められている。子どもが希望を持って生きていけるよう、人生の初期の段階で格差をつけてはいけない、人生の最初を力強く生きさせるようにする保障が必要。

5つのCが問われる保育

① CARING

ケアとは悲しみや喜びを共有することができると。子どもとの個別的なかわりかかわりがもてるような

環境づくりが必要。

② CONTINUITY

継続性・・・子どもとずっと継続的にかかわっていきけることだが、福祉のワーキングプアーと言われる中で指導員が本当に良い仕事をしていけるのか？

③ CHOOSE

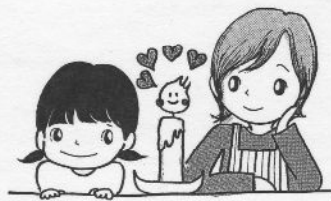
選択・・・たくさんの中から何でも子どもが選ぶことができる状況が必要。

④ CHANGE

変革・・・専門性を磨き昨日に比べて今日はよりよく明日はさらにと変化していけること。

⑤ COMMON VALUE

共通の価値観・・・保護者と指導員が、子どもがどう育つて欲しいか想いをとるに考えていく仕組み。



希望としての学童保育

希望のしくみとはどんな目標を持てるかということ。子育ては山登りと同じで頂上がある程度見えていないとつらい。

こんな子に育って欲しい、こう育んでいきたいこと多くの想いはあるが、一番大事にしたいことは自己肯定感・・・子ども自身が自分価値ある人間だと思えるようにしていくことだ。

学童保育で子どもたちがより楽しくともに生きていくけること、自立していくことの手助けを人生の先輩として保護者・指導員がどうつくってあげたいのか考えなければいけない。

大切なものを見つづけるために  
なぜ結婚したか？なぜ子どもをもうけたか？なぜ学童保育か？  
これらを根源から考えた時、ひとりで生きるより二人で生きた方がより充実して楽しいはずだと考えなくてはならない。



この子と出会ってよかったと思えること、子どもがこの親と出会うことができてよかったと思える環境をつくっていききたい。

まとめ

こんな時代だから「揺らぐことができる力」が求められる。はじめから正解は無いのだから、いろいろ実践しながら軌道修正すれば良い。

学童保育は子どもの未来をつくる場所、人を大切に幸せを支援する場であり、指導員には「子どもたちのローソクになつて欲しい。

決して明るくはないが、ゆらゆらと暖かく揺れながら子どもたちの「希望の灯り」として人生の伴走者として。

親の名にかけて、指導員の名にかけて、それぞれの役割を果たして希望の灯りをともそうではないか。